

子どもたちと交通社会

子どもの視界と行動 (「人と車」10月号から)

はじめに

(一財)全日本交通安全協会発行「人と車」10月号掲載記事の概要を紹介する。筆者はモータージャーナリストの岩貞るみこ(いわさだ・るみこ)氏である。

歩行者としての子供の能力や行動を知ることによって事故を防止しようという内容である。

■ 背の高さの違い

大人と子供では背の高さが異なるため、歩いているときに見える景色が異なる。

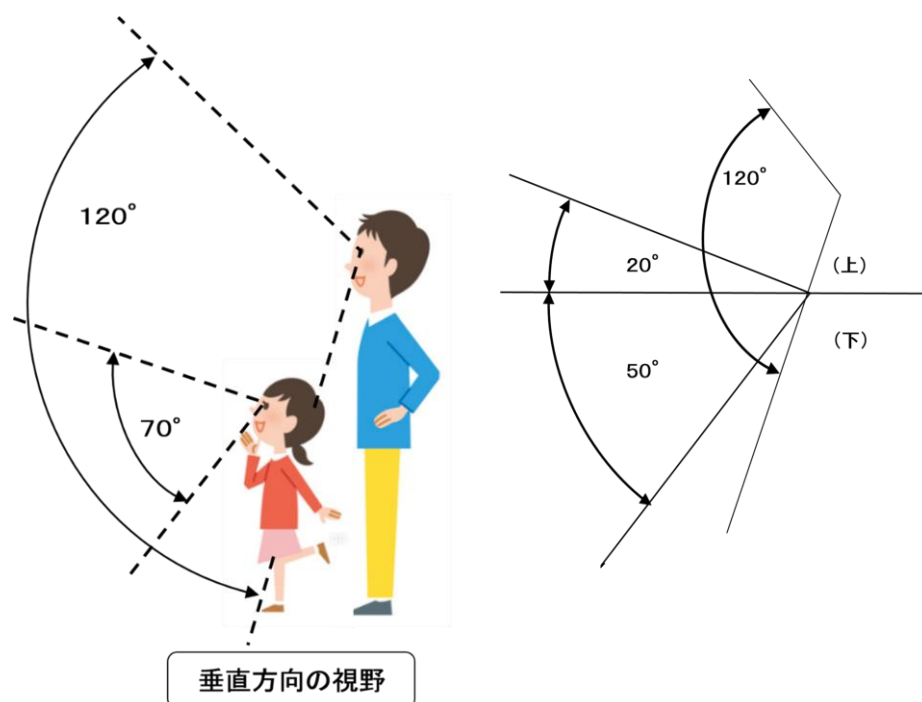
最近では軽自動車もトールワゴンタイプが増え、全高が160センチを超えるものも出てきた。小学2年生、8歳の子供の平均身長は125センチであり、背の高い車が止まっているとその向こうがほとんど見えない。

背の高い親には見える対向車も子供には見えないので、飛び出そうとした我が子を叱るよりも、子供の身体能力を理解して安全を確認する方法を教えなくてはならない。

■ 視野の違い

背の高さだけでなく視野そのものにも差がある。

元ストックホルム大学児童心理研究所所長で児童心理学者のスティナ・サンデルス氏は、上下方向の視野は、大人が120度で6歳児は70度であると述べている(下図)。



また、水平方向の視野は、大人が 150 度あるのに対して、6 歳児は 90 度だそうである（右図）。

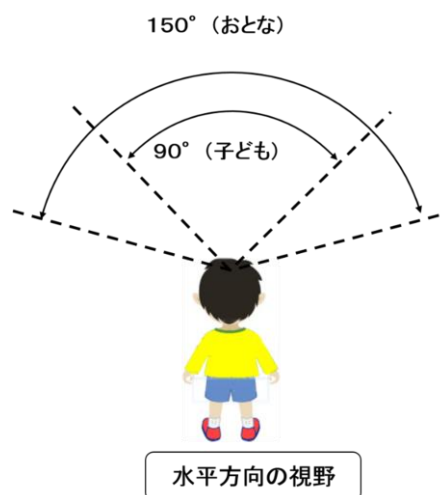
子供の視野は狭く、大人では簡単に気付くものにも気付かない。道を渡るときは、ちらりと左右を見るのではなく、顔をしっかり向けて見るよう指導する必要がある。

いっぽうドライバーは、道を渡ろうとしている子供を見かけたときは「顔がこちらに向いている。きっと自分のクルマを認識しているだろう」と思っはいけない。顔がこちらを向いても、視界には入っていないことが多い。

この視野狭窄は、高齢者でも同じである。高齢になるにつれ視野は狭くなるので、高齢者が道路を渡ろうとしているときも注意しなければならない。

視野の違いを体験するツールとして「チャイルドビジョン」と呼ばれるものがある（写真右）。サンデルス氏の考えをもとに、ペーパークラフト・デザイナーの寺田松雄氏が考案したもので、紙で簡単に作れ、眼鏡のようにはめて体験できる。

これをはめてしゃがんでみると子供が見える景色が再現できる。ホームページでダウンロードしてプリントし、組み立てることができる。



■ 視点の違い

見え方でもう一つ注意したいのは、視点の違いである。

秋田大学の浜岡秀勝氏らが行った「子供の視点を考慮した安全な歩行者空間に関する研究」によると、大人と子供では、歩いているときに見ているものが違うという結果が出ている。

被験者は、大学生と小学1年生が三人ずつ。大学生チームの平均身長は 175 センチ、小学生チームは 130 センチで、その差は 45 センチである。被験者全員にアイカメラ（何を見ているのか視線の動きがすべて分かるもの）を装着させた。

まず、高さを調べたところ、大学生は「中」の高さにある構造物を最も見ていて約半分、残りの半分は、上：下=2：3であった。いっぽう、小学1年生は、9割程度「下」を見ていた。自分の背と同じくらいの高さや足元の道に目が行く。

次に奥行について検証した。奥を見ると危険予測をたてやすくなる。大学生は半分以上「奥」を見ているのに対して、小学生は「手前」と「中間」ばかりを見ていて、「奥」はほとんど見ていなかった。

この研究の中では、ドライバーには有益な「コーナーミラー」が歩行中の子供には危険な存在になりかねないことが報告されている。道路の幅が十分とれないことが多い日本で

は、電柱、標識、コーナーミラーなどが歩道や路側帯に立てられていることが多い。こうした場所で子供たちは、車道側にはみ出すようにして通過するが、その際の視線の動きを見ると、コーナーミラーなどの周りに集中しており、周りのクルマにはまるで注意を払わなかった。交通安全のために立てられたものが子供たちの危険を生み出していることになる。

■ 突発的な動きをする子供たち

登校時もそうだが、下校時になると子供たちの気分も緩みがちになる。仲のいい友達とじゃれ合ったり、走りだしたりする。道路は遊び場状態になっている。

ドライバーにとって気をつけなければいけないのは、歩道や路側帯を歩いていたはずなのに、いきなり車道側に飛び出してくるケースである。ドライバーは、彼らの傍を通るときは速度を落とし、急に飛び出してきたても対応できる運転に心がける必要がある。

以 上